

登校拒否と「豊かさの病」

春日 耕 夫

(受付 2002年9月24日)

登校拒否（不登校）が依然として増加し続けている。

この問題に詳しいある精神医学関係者によれば、この問題が臨床現場で注目されるようになったのは1960年前後の時点だったという¹⁾。その後10年余の間横ばい状態を続けた登校拒否児童生徒数は、1970年代半ばからは徐々に増加し始め（中学生の場合）、それ以降は年を追うごとに増加の一途をたどることとなる（次頁の〈表〉を参照）。

1960年と言えば、先の世界大戦によって破壊しつくされた日本社会がようやく復興を成し遂げ、本格的な高度経済成長期に突入していった時点であった。それは、日本社会が世界有数の豊かさに向かって前進し始めた時点でもあった。また、1970年代半ばと言えば、いわゆる「第一次オイルショック（1973年）」に端を発する世界的インフレーションのなかで日本の高度経済成長が終焉を迎え、「低成長」への転換を余儀なくされていった時点であった。それは、裏返せば、日本社会が経済的豊かさの極に到達した時点でもあった。つまり、登校拒否は日本社会が豊かさに向かって前進し始めた時点で現れ始め、豊かさの極に到達した時点から増加し始めた現象だったというわけである。

とすると、登校拒否は、少なくとも一面では、豊かさがもたらした現象だと言ってよいのではないか。単なる学校の問題ではなく、単なる家庭の問題でもなく、日本が豊かな社会になったこと、そのことに発する現象である、と。

* 本稿は1998～1999年度広島修道大学総合研究所調査研究費による研究成果の一部である。

1) 稲村博『不登校の研究』新曜社、1994、4頁。

〈表〉登校拒否児童生徒数の推移

(人)

年度	小 学 校			中 学 校		
	登 校 拒否者数	全児童数	比 率 (%)	登 校 拒否者数	全生徒数	比 率 (%)
1966	4,430	9,584,061	0.05	12,286	5,555,762	0.22
1967	4,111	9,452,071	0.04	11,255	5,270,854	0.21
1968	3,875	9,383,182	0.04	9,631	5,043,069	0.19
1969	3,807	9,403,193	0.04	9,239	4,865,196	0.19
1970	3,626	9,493,485	0.04	8,357	4,716,833	0.18
1971	3,292	9,595,021	0.03	7,522	4,694,250	0.16
1972	2,958	9,696,133	0.03	7,066	4,688,444	0.15
1973	3,017	9,816,536	0.03	7,880	4,779,593	0.16
1974	2,651	10,088,776	0.03	7,310	4,735,705	0.15
1975	2,830	10,364,846	0.03	7,704	4,762,442	0.16
1976	2,951	10,609,985	0.03	8,362	4,833,902	0.17
1977	2,965	10,819,651	0.03	9,808	4,977,119	0.20
1978	3,211	11,146,874	0.03	10,429	5,048,296	0.21
1979	3,434	11,629,110	0.03	12,002	4,966,972	0.24
1980	3,679	11,828,573	0.03	13,536	5,094,402	0.27
1981	3,625	11,924,653	0.03	15,912	5,299,282	0.30
1982	3,624	11,901,520	0.03	20,165	5,623,975	0.36
1983	3,840	11,739,452	0.03	24,059	5,706,810	0.42
1984	3,976	11,464,221	0.03	26,215	5,828,867	0.45
1985	4,071	11,095,372	0.04	27,926	5,990,183	0.47
1986	4,407	10,665,404	0.04	29,673	6,105,749	0.49
1987	5,293	10,226,323	0.05	32,748	6,081,330	0.54
1988	6,291	9,872,520	0.06	36,110	5,896,080	0.61
1989	7,179	9,606,627	0.07	40,087	5,619,297	0.71
1990	8,014	9,373,295	0.09	40,223	5,369,162	0.75
1991	9,645 (12,637)	9,157,429	0.11 (0.14)	43,711 (54,112)	5,188,314	0.84 (1.04)
1992	10,436 (13,702)	8,947,226	0.12 (0.15)	47,482 (58,363)	5,036,840	0.94 (1.16)
1993	11,469 (14,769)	8,768,881	0.13 (0.17)	49,212 (60,039)	4,850,137	1.01 (1.24)
1994	12,240 (15,786)	8,582,871	0.14 (0.18)	51,365 (61,663)	4,681,166	1.10 (1.32)
1995	12,782 (16,569)	8,370,246	0.15 (0.20)	54,092 (65,022)	4,570,390	1.18 (1.42)
1996	15,314 (19,498)	8,105,629	0.19 (0.24)	62,228 (74,853)	4,527,400	1.37 (1.65)
1997	16,383 (20,765)	7,855,387	0.21 (0.26)	71,127 (84,701)	4,481,480	1.59 (1.89)

(注) 1 () 内は、年度間に30日以上欠席した不登校児童生徒に関する数値を表す。

2 比率は不登校者数の全児童生徒数に対する比率である。

3 不登校とは、何らかの心理的、情緒的、身体的、あるいは社会的要因・背景により、児童生徒が登校しないあるいはしたくともできない状況にあること(ただし、病気や経済的な理由によるものを除く)をいう。

資料：『青少年白書』各年度版

春日：登校拒否と「豊かさの病」

豊かさは、ある面では人間の生を豊かにする。しかし、他のある面では、人間を大変な苦悩に直面させる。「ロゴセラピー」の名で広く知られ、世界的ベストセラーとなった著書『夜と霧』でそれ以上に広く知られたオーストリアの精神科医師 فرانクル (Viktor E. Frankl) は、「人びとは豊かな社会のなかでより不幸になる」と言う²⁾。社会が豊かになればなるほど人びとはあらゆる欲求を満たしていくようになる。だが、そうなればなるほど満たせなくなる欲求がひとつだけある。「意味への欲求」がそれである。そのため、豊かになればなるほど人びとは「実存的空虚」と「無意味感」に悩まなければならなくなる。——以上がフランクルが語っている言葉の意味である。

豊かさがもたらすこのような不幸。それは「いま」という時代がもたらす不幸なのである。そうした「時代の不幸」に対する子どもたちの反応。そのひとつの現れが登校拒否だと言ってよいのではないか。

*

登校拒否については、しかしながら、その原因をもっぱら「家庭におけるしつけ」や「養育のあり方」に求めようとする議論が行われる一方で、そうした議論に激しく反発しつつ、「学校にこそその原因はある」とする主張がもう一方では広く行われてきた。そうした主張をもっとも簡明な形で展開した例としては、たとえば、国立国府台病院の児童精神科医師として早い時期から登校拒否問題に実践的にかかわってきた渡辺^{たかし}位の主張が挙げられよう。

渡辺は、まず、「“ずる休み”による怠学」から登校拒否を明確に区別する必要を語りつつ、次のように言う。すなわち、「登校拒否は〔ずる休みによる怠学のように〕意識的・意図的なものではなく、(中略)登校する意志があっても、学校状況への強い不安からどうしても登校することができな

2) V. E. フランクル『宿命を超えて自己を超えて』山田邦男・松田美佳訳、春秋社、1997、103頁。

いのです」と³⁾。こう述べたうえで、渡辺は、さらに次のように言う。すなわち、「登校拒否は学校的な状況と関連した子どもの反応と言えますから、不登校発現の主舞台である学校状況を除外して〔不登校の発現要因を〕考えることはできません。(中略) 少なくとも学校に通うことを拒否するという事実からみても、学校状況を除外して、子どもや家族だけの問題に帰することは本質を見失うことになると思われまます」と⁴⁾。こうして、渡辺は、結論的に、以下のように言うのである。すなわち、「登校拒否は子どもの成長・発達を保障するためには歪曲されて不適切となっている学校教育に対して子どもが示す無意識的な自己防衛的回避行動であり、登校拒否発現の要因は(中略) 学校教育の現況と、それに巻き込まれ醸成された子ども不在の教育観・育児観であると言えます」と⁵⁾。

要するに、登校拒否は「学校状況に対する強い不安」ゆえに起こる不登校にほかならないのだから、登校拒否発現の要因は「学校状況」にあると考えなければならない、「子どもの成長・発達を保障するためには歪曲されて不適切となっている学校教育の現況」にあると考えなければならない、というわけである。

しかし、そうだろうか。登校拒否という問題を単なる「学校状況」の問題とか「学校教育の現況」の問題として片づけてしまってよいのだろうか。もちろん、登校拒否は「学校に通うこと」に対する拒否であるがゆえに学校にこそその原因はあると考えなければならないとする渡辺の論理はきわめて明快ではある。しかし、そんな単純な論理で片づけてしまってよいのだろうか。むしろ、「いま」という時代のもっと深層の部分に「登校拒否発現の要因」は求めなければならないのではないだろうか。

そうした点に関する興味深い観察を、たとえば河上亮一のエッセイは素

3) 渡辺位『子どもたちは訴える——病める社会で病む子ども』勁草書房、1983、21頁。なお、引用文中の〔 〕内の言葉は引用者による補足である。以下同じ。

4) 同上、27頁。

5) 同上、38頁。

朴な口調で語っている。中学校教師としての長年の経験を踏まえて（いささか「危険」ではあるが）ユニークな発言を続けている河上は、登校拒否状態に陥る子どもたちにとっての根本的な問題は、彼らが学校に来ないという問題ではなく、「他者とともに生きること」に彼らが困難を覚えているという問題だと指摘し、次のように言うのである。すなわち、「〔登校拒否状態に陥る子どもたちの〕根本的な問題は学校へ来ないということではなく、他人といっしょに生きるのがむずかしいということである。学校が不登校の原因であればもう少し気が楽だし、対応の仕方もあるのだが、それだけでは済まないところが問題なのである。たとえば、ずっと学校に来ていて、学期の変わり目などにふっと来なくなる生徒がいる。そういう生徒は、前々から、〔しんどい思いを抱えながらも〕よくがんばって来ているなと思うような生徒が多い。学校に来てほつんとひとりだったり、他人とはほとんどしゃべらなかつたり、何かを他人といっしょにやるのが不得手で、仲間とうまくとけ込めない生徒なのだ。〔そういう生徒がふっと来なくなる形で登校拒否が始まるのだ〕」と⁶⁾。

こう語りつつ、河上は、登校拒否状態に陥る子どもたちに見られるこうした問題、つまり、「他者とともに生きること」に困難を覚えるという問題は、決して登校拒否状態に陥る子どもたちだけの問題ではなく、最近の子どもたち一般が共通に抱えている問題なのだと指摘する。

彼は次のように言う。

「最近の生徒を見ていると、自我に柔軟性がなく、固くて非常に個別的、つまり社会性がなくなっているように思われる。だから、他人から働きかけを受けたとき、うまくそれを受け入れて自我を広げていくことができないため、すぐに傷ついてしまう。そして、傷つくのを避けたいがために人間関係が非常に希薄になっている」。「他人の言葉や動きが自分を傷つけるのが怖くて、人が自分をどう見ているか、どんなふうに自分に反応するか

6) 河上亮一『学校崩壊』草思社、1999、52頁。

ということに絶えず緊張して身構えている。同時に、自分が他人を傷つけるのが怖くて、必要以上に相手を気にしているのだ。「ふだんクラスのなかでは和気あいあいとしているように見えるのだが、生徒一人ひとりに話を聞いたり、よく観察してみると、自分のまわりにバリアーをつくって、そのなかにはお互いに入らないようにしているようだ。ところが、何かあればそんなバリアーなどすぐに壊れてしまうから、いつも非常にピリピリしながら人間関係を作ることになる」と⁷⁾。

こうして、河上は、最近の子どもたち一般が全体として「他者とともに生きること」に困難を覚えるようになってきているという現実を指摘し、そうした現実が登校拒否が多発するという事態の背景的要因としてあるのではないかと言うのである。

河上によるこうした観察は妥当な観察だと言ってよいのだろうか。

おそらく、妥当な観察だと言ってよいのではないか。

実際、そうした観察を裏付けるかのように、いま子どもや若者たちのまわりには、この世代の人たちが「他者と^あともに在ること」に困難を覚えるようになった人たちだからこそ起こっていると思われるさまざまな問題がさまざまな形で現れているのである。たとえば、近年「社会的引きこもり」と呼ばれて注目を集めるようになった問題がますます深刻化しつつあると言われている。「自己臭症」とか「醜形恐怖症」といった類の病気に苦しむ若者も増加しつつあると言われている。「拒食症」や「過食症」など、一般に「摂食障害」と呼ばれる病気もますます広がりつつあると言われている。さらに、かつて中島梓が「ダイエット症候群」と呼んだ「病気ならぬ病気」⁸⁾も非常に広く広がっていると言われている。そのほか、河上自身も指摘していたように、ほとんどの子どもや若者が多かれ少なかれ対人関係上の問題を抱えこんでいると言われているのである。そういった形で、いま子どもや若者たちのまわりには、この世代の人たちが「他者とともに在る

7) 同上、16頁。

8) 中島梓『コミュニケーション不全症候群』筑摩書房、1991。

こと」に困難を覚えるようになった人たちだからこそ起こっていると思われるさまざまな問題がさまざまな形で現れているのであるが、そういった問題はいずれも、貧しかったかつての時代ならば決してみられなかった問題であり、かつ、「いま」という時代が豊かな時代だからこそ生じている問題だという意味で——「病」という言葉をあくまでも比喩的な意味で使って言えば——「豊かさの病」と言ってよいだろう。登校拒否もまた、そうした「豊かさの病」と基本的には根を同じくする問題のひとつだと言ってよいのではないか⁹⁾。

*

それにしても、なぜ豊かさはそのような問題を引き起こすのだろうか。その理由は、何よりもまず、豊かさが「何らかの課題の達成に向かって頑張っていく」とか「何か目的をもって努力していく」といった生き方、つまり、「課題指向的」な生き方、あるいは「目的指向的」な生き方を著しく困難にさせてしまうからである。

それでは、なぜ豊かさはそういった生き方（以下、単に「課題指向的」な生き方と呼ぶ）を困難にさせてしまうのか。その理由は、「『課題指向的』な生き方が成り立つためにはどんな条件が必要か」と考えてみれば自ずと明らかになってくる。そこで、以下、「課題指向的」な生き方が成り立つ条件について考えてみよう。

そうした条件としては、少なくとも、二つのものを挙げることができる。そのひとつは、ある課題を何としてでも達成しなければならない状況にあるということである。極言すれば、その課題を達成しないかぎり生きてはいけない状況にあるということ、したがって、生きていくためには何としてでもその課題を達成しなければならない状況にあるということ、である。

9) 本文中でも述べたように、ここで「病」という言葉はあくまでも比喩的な意味で用いているということ、したがって、「登校拒否は一種の病気だ」などと言いたいわけでは決してないということ、念のために付言しておきたい。

たとえば、その日その日を生きていくこと自体が大変で、その日その日を生きていくためにはその日その日を生きていくために必要な食糧を何としてでも手に入れなければならないという状況がその一例である。仮にそういった状況にあったとすれば、人は、その課題を達成しようとして、必死に頑張ろうとするはずである。そういった形で、何としてでもその課題を達成しなければならない状況にあるということ、そのことが、「課題指向的」な生き方が成り立つひとつの条件だと言ってよいだろう。

その場合、「何としてでもその課題を達成しなければならない状況」というのは、言いかえれば、どうしても必要なものが「ない」という状況、極言すれば、それなしでは生きてはいけないほど必要不可欠なものが「ない」という状況、と言ってもよいわけだから、それは、さらに言いかえれば、「欠乏状態」と言ってもよいだろう。そうすると、「欠乏状態」こそ「課題指向的」な生き方が成り立つひとつの条件だということになってくる。ただし、この場合の「課題指向的」な生き方というのは、そうせざるをえないからそうするという意味で、「強制された『課題指向的』生き方」とでも呼ぶべきものではあるけれども。

次に、「課題指向的」な生き方が成り立つもうひとつの条件として考えられるのは、「どうしても手に入れたいと思うもの」があるということ、あるいは、「どうしてもそうなりたいと思うもの」があるということである。その場合、「どうしても手に入れたいと思うもの」を手に入れること、あるいは、「どうしてもそうなりたいと思うもの」になるということ、そのことが、その人にとっての課題や目的となるわけである。

ただし、それがその人にとっての課題や目的となるためには、そこには何らかの「希望」がなければならないはずである。なぜなら、一生懸命頑張れば「それ」を手に入れることができるのではないかという「希望」や必死に努力すれば「そうなりたいと思うもの」になれるのではないかという「希望」がわずかなりともあるのでないかぎり、「それ」を目指して頑張ろうということにはならないからである。

というわけで、「課題指向的」な生き方が成り立つ条件としては、少なくとも、「欠乏」と「希望」という二つの条件を挙げることができると言ってよいだろう。つまり、これら二つの条件のうちのいずれか、あるいは双方が存在するときにはじめて、「課題指向的」な生き方は可能になるというわけである。これを称して筆者は（言葉遊び的に）「ツウ・ボウ（二つのボウ）理論」と呼んでいるのであるが、問題は、まさしくこの二つの条件のいずれをも豊かさは解消してしまうということなのである。

まず第一に、豊かさは、欲しいものがなかなか手に入らないという状況、すなわち、「欠乏状態」を解消させてしまうのである。当然、欲しいものを手に入れるために一生懸命努力するという必要性はなくなってしまう。つまり、豊かさは、「欠乏状態」を解消させることによって、「課題指向的」な生き方をしなければならぬ必要性をも解消させてしまうのである。

しかも、豊かになればなるほどあらゆる欲求が「それ」を満たそうとして努力する前に片っ端から満たされてしまうわけだから、「それ」を目指して努力すべき「課題」が次から次になくなってしまうのである。当然、「課題指向的」な生き方はしたくてもできないということになってくる。

こうして、豊かさは「欠乏状態」を解消させてしまうことによって「課題指向的」な生き方をしなければならぬ必要性を解消させてしまうだけでなく、「課題指向的」な生き方はしたくてもできないという状況のなかに人間を追い込んでいってしまうのである。

次に、豊かさは、「課題指向的」な生き方が成り立つもうひとつの条件である「希望」という点に関しても、否定的な結果をもたらしてしまうのである。なぜなら、豊かになればなるほど「日常的な」欲求は次から次に満たされてしまうわけだから、日常的な欲求を満たすということそれ自体は、「それ」を目指して努力すべき課題や目的にならなくなってしまふのである。当然、豊かな時代の人間にとって、「それ」を達成すべく必死に努力するだけの価値ある課題や目的がもしあるとしたら、それは何らかの意味で「日常性」を超えたものでなければならぬということになってくる。たとえ

ば、安室奈美恵のようなスター歌手になって脚光を浴びるとか、松坂大輔投手のようなプロ野球選手になって全国のファンをうならせる、などがそれである。あるいは、そこまでは行かないとしても、少なくとも何らかの意味で「日常性」を超えたもの、そういったものでないと、豊かな時代の人間にとっては魅力ある課題や目的にならなくなってしまうのである。

ところが、そうなってくると、今度は、そういったことを課題や目的として頑張ろうということにはならなくなってしまうのである。なぜなら、そういったことを課題や目的として頑張ろうとしてみたところで、そこには実現可能性というものがないわけだからである。つまり、一生懸命努力すれば何とか達成できるかもしれないという「希望」がそこにはないわけなのである。そういった意味でも、豊かさは、「課題指向的」な生き方はしたくてもできないという状況のなかに人間を追い込んでいってしまうのである。

*

こうして、豊かな時代というのは、二重の意味で、「課題指向的」な生き方を非常に難しくしてしまう時代なのである。まさしくそういった時代のなかでいま子どもたちは生きているのである。そういった意味では、いまの子どもたちは、本当に困難な状況のなかを生かされていると言わなければなるまい。

もちろん、欲しいものが何でも手に入るという点では、いまの子どもたちは非常に恵まれていると言ってよいだろう。しかしながら、その代わりに、成し遂げるべき課題や目的を容易にはもてなくさせられてしまうのである。そのことがどれほど困難な状況に子どもたちを導いていくか、説明する必要があるだろうか。

私たちが何かに向かって一生懸命努力できるのも、何かに夢中になれるのも、成し遂げるべき課題や目的を私たちがもっているかぎりにおいてのみなのである。そういった課題や目的を私たちがもっているかぎりにおい

てのみ、私たちは一生懸命努力することもできるし、何かに夢中になることもできるのである。そして、そういった形で一生懸命努力したり、何かに夢中になったりすることができるかぎりにおいてのみ、私たちは充実感をもって生きることができし、生きることの意味について「病的に」思いわずらったりすることなく生きていくこともできるようになるのである。その課題や目的を容易にはもてなくさせられてしまうということ、そのことがどれほど深刻な状況に子どもたちを導いていくか、説明する必要があるだろうか¹⁰⁾。

筆者自身、まわりにいる学生諸君にときどき聞いてみるのである。「何か目的をもって頑張っている人って、いいなあとは思わないか？」と。そう

10) フランクルは「人間の実存の本質は自己超越にある」と言い、次のように言う。すなわち、「人間は行動することによって世界に働きかける存在なのです。その世界には彼が実現したいと望むさまざまな課題があります。そこには愛することができる伴侶がいます」と（フランクル、前掲書、104-405頁）。フランクルはまた次のようにも言う。すなわち、「主体の本質は自分自身を超越することによって対象に向かっていくという点にあります。（中略）私が人間であり、個人であり、私自身であり、主体であるのは、私が私自身を超越し、なにかのことがらに、またはだれか他の個人に身を捧げるからなのです」と（同上、45頁）。さらに、フランクルは次のようにも言う。すなわち、「私たちの眼は自己超越的です。まわりの世界を視覚的に知覚する機能を果たす眼の能力は、鏡に映るということを別にすると、眼自身を知覚することができないという無能力と一体になっています。眼が眼自身を感じたり見たりするなら眼は病気なのです。眼が雲のような濁りを見るなら白内障です。水晶体が混濁する病気です。電灯のまわりに虹のような色輪が見えるなら緑内障です。前眼房の眼内圧が亢進する病気です。正常な眼は眼自身を見たりはしません。人間存在もちょうどそれとおなじです。自己超越とは、人間が自分を無視し忘れること、自分を顧みないことによって完全に自分自身であり完全に人間であることです。つまり、なんらかの仕事に専心することやなんらかの意味を実現することによって、あるいは、ある一つの使命、またはある一人の人間、つまり伴侶に献身することによって、人間は完全に自分自身になります」と（同上、106-107頁）。フランクルのこれらの言葉は、成し遂げるべき課題や目的をもつことができなくなったとき、人間がどれほど生き難い状況に直面させられることになるかについて、見事に語っていると筆者は思う。

すると、たいていの学生諸君が言うのである。「もちろん、そう思いますよ」と。しかし、「それじゃあ、あなたたち自身はどうなんだ？ そんな生き方をしているのか？」と聞くと、たいていの学生諸君が言うのである。「してませんねえ」と。そこで、さらにもう一步突っ込んで「そんな生き方をしたいとは思わないのか？」と聞くと、たいていの学生諸君が言うのである。「それはしたいですよ！」と。だから、「だったら、そうすればいいじゃないか！」と言うと、「でもお……」と彼らは言うのである。「したいと思ったって、できないじゃないですか！」と。それで、「どうして？」と聞くと、彼らは口を揃えて言うのである。「だって、何を目指せばいいかわからないじゃないですか！」と。「簡単にできることだったら目的にはならないし、できっこないことだったらやっぱり目的にはならないし、だったら、何を目指せばいいかわからないじゃないですか！」と。

こんな感じの若者たちも、外面だけを見ているかぎり、毎日毎日を何屈託なく、「おもしろおかしく」生きているように、おそらく見えてしまうだろうと筆者は思う。しかしながら、彼ら自身、そういった生き方に必ずしも満足しているわけではないのである。むしろ、彼ら自身が心の芯の芯の部分では満たされない思いを抱きながら生きているに違いないのである¹¹⁾。あるいは、自分で自分の生き方を振り返ってみたとき、自分で自分がいやになるような思いを無意識のうちに抱きながら生きているに違いないので

- 11) 筆者が身近に接している学生のひとりが自分の心情を述べた「やることがない」と題するメモを引用しておこう。それは以下のようなメモである。すなわち——
- やることがない。
 - やりたいこともない。
 - やらないといけないことはある。
 - でも、それはそんなにやりたいことではない。
 - それは本気でやらなくてもなんとかなる。
 - だから本気でやらない。
 - だから楽しくない。
 - 何か本気でやるのが欲しい。
 - 本気で何かがしたい。

ある。当然、「何か目的をもって頑張っていく」とか「何か目指すべきものに向かって努力していく」といった生き方ができたらなあと、彼ら自身が心の深いところでは思うともなく思っているに違いないのである。しかしながら、だからと言って、「そういった生き方を自分もしよう！」とか「そういった生き方を自分もしたい！」ということには必ずしもならないのである。なぜなら、そうなった瞬間に「それではいったい何を指すのか？」ということになってしまうし、現実には目指すべき課題や目的などもないまま、その日その日を「ごまかしごまかし」生きている自分自身というものに直面しなければならなくなってしまうからである。それがどれほど大変なことか、説明する必要があるだろうか。

「いったい何を指すのか？」という問いを問うということは、本当は非常に「恐いこと」なのである。なぜなら、そういった問いを問うということは、結局は、「いったい何のために？」という問いを問うということにそのままつながっていくわけだからである。たとえば、「いったい何のために勉強するのか？」「いったい何のために学校に行くのか？」「いや、そもそも生きているのは何のためなのか？」などといった問いを問うということにそのままつながっていく問い、それが「いったい何を指すのか？」という問いなのである。そういった問いをとことん問いつめていったらどうなるか、説明するまでもあるまい。結局は「何のためかわからない」という結論にたどり着いてしまうのである。たとえば、「いったい何のために勉強するのか？」と問うていって、結局は「何のためかわからない」という結論にたどり着いてしまう。あるいは、「いったい何のために学校に行くのか？」と問うていって、結局は「何のためかわからない」という結論にたどり着いてしまう。さらには、「そもそも生きているのは何のためなのか？」と問うていって、結局は「何のためかわからない」という結論にたどり着いてしまう。これが「いったい何を指すのか？」という問いをとことん問いつめていった場合に最終的にはたどり着いてしまう結論なのである。そういった意味では、「いったい何を指すのか？」という問いを問

うということは、非常に「危険なこと」なのである。

だから、そういった問いをあまりにも生真面目に問いつめていってはいけないのである。あまりにも生真面目に問いつめていったら大変なことになってしまうのである。極端に言えば、まともには生きていけなくなってしまうのである。だから、とにかくにも生きていくためには、あまりにも生真面目には考えないで、考えてもしかたのないことは考えないで、考えれば考えるほど暗い気持ちになるようなことも考えないで、とりあえずはそのときどきの「いま」を楽しんでいくというふうにしなればいけないのである。そうでもしないかぎり、とても生きてはいけないのである。それが現実というものなのである。——といった感覚。と言えは少々極端にすぎるかも知れないが、いまの若い人たちの多くが無意識のうちに抱いている感覚をいささか極端化した言葉で表現するとすれば、こういった感覚だと言ってよいのではないか。

とすると、どういうことになってくるのだろうか。友だちづきあいが何より大事、ということになってくるのである。なぜなら、目指すべき課題や目的が明確にあって、その課題や目的を何としてでも達成しなければならないという状況にもしあったとすれば、その課題や目的の達成に向かって全身全霊を打ち込んでいくということになるだろうから、「友だちづきあいなんて二の次、三の次！」ということになってしまうだろうけれども、打ち込むべき課題もなければ、目指すべき目的もないという場合は、有り余る時間をもてあましてしまつて死ぬほど退屈、ということになってしまうだろうから、「友だちなしではやってはいけない！」ということになってしまうのである。しかも、友だちもいなくて、ひとりでボーッとしていなければならないということにでもなったら、余計なことばかり考えてしまつて、「自分はいったい何のために生きているんだろう？」とか「いったい何を目指して生きていけばいいんだろう？」などと考えて暗い気持ちになったり、「自分は誰からも必要とされていないのではないか？」と落ちてこんでしまうということにしかならないから、そうならないためにも、友

だちづきあいは何より大事ということになってしまうのである。

こうして、いまの若い人たちにとっては、友だちづきあいというものの重要性が異常なぐらいに大きくなっているのである。その重要さたるや、「それなしではとても生きてはいけない」と言っても言い過ぎにはならないと言ってよいくらい、それくらい、いまの若い人たちにとっては友だちづきあいというものの重要性が大きくなっているのである。ところが、皮肉なことに、ほかならぬその友だちづきあいというものを非常に苦痛に感じているのがいまの若い人たちでもあるのである。

いまの若い人たちは、一般的に言って、対人関係に異常なぐらいに気を使ってしまう。そのため、自分がこう言ったら相手はこう思っているやないか、こう言ったら相手はこう思っているやないか、こう言ったら相手はこう思っているやないか、などと考えてしまって、言いたいことも言わず、相手に合わせるのに汲々としてしまっているのである。

と同時に、いまの若い人たちは、自分がまわりからどう思われるかということにも異常なぐらいに気を使ってしまうのである。そのため、自分がこう言ったら相手からこう思われるのではないか、こう言ったら相手からこう思われるのではないか、こう言ったら相手からこう思われるのではないか、などと考えてしまって、自意識過剰のあまり身動きがつかなくなってしまうのである。

こうして、いまの若い人たちは、一般的に言って、対人関係場面で異常なぐらいに気を使い、自意識過剰のあまり身動きがつかなくなってしまうという傾向が非常に強くなっているのである。

それにしても、なぜそうになってしまうのだろうか。その背景にあるのもやはり「豊かさ」の問題だと言ってよいのではないか。

すでに述べたように、豊かさは「何らかの課題の達成に向かって頑張っていく」とか「何か目的をもって努力していく」といった生き方を著しく困難にさせてしまう。つまり、「課題指向的」な生き方、あるいは「目的指

向的」な生き方を著しく困難にさせてしまう時代、それが「豊かな時代」というものなのである。まさしくそういった時代のなかでいま子どもや若者たちは生きているということ、そのことが、対人関係場面で異常なぐらいに気を使い、自意識過剰のあまり身動きがつかなくなってしまうような子どもや若者の大量出現という事態を招いていると言っ**てよい**のではないか。

なぜか。

その理由は、以下のように考えてみれば明らかである。

まず、いまがそのような時代ではなく、「課題指向的」な生き方が容易にできる時代だったとしてみよう。あるいは、否応なく「課題指向的」な生き方をしなければならない時代だったとしてみよう。そうすると、人はそれぞれ、自分の課題を達成しようとして、必死に頑張っていくということになるはずである。極端に言えば、**我を忘れて、なりふり構わず**、自分の課題の達成に向かって全身全霊を打ち込んでいくということになるはずである。そうすると、人はそれぞれ、**我を忘れて、なりふり構わず**、自分の課題の達成に向かって全身全霊を打ち込んでいくというわけだから、対人関係場面で必要以上に気を使ったり、自意識過剰になって身動きがつかなくなるということには絶対にならないはずなのである。なぜなら、「我を忘れて」とは、言いかえれば、「自意識過剰になんかなってはいられない」ということにほかならず、「なりふり構わず」とは、言いかえれば、「人がどう思うかなんて構ってはいられない」ということにほかならないわけだからである。当然、「いま」という時代が、**我を忘れて、なりふり構わず**、自分の課題の達成に向かって全身全霊を打ち込んでいくという生き方が可能な時代、あるいは、否応なくそういった生き方をせざるをえない時代だったとすれば、対人関係場面で必要以上に気を使ったり、自意識過剰になって身動きがつかなくなるような子どもや若者の大量出現ということには絶対にならないはずなのである。

とすると、どういうことになってくるのだろうか。そういった問題はい

ずれも、「いま」という時代が豊かな時代となり、「課題指向的」な生き方が容易ではない時代となってしまったからこそ生じている問題だということになってくるのではないだろうか。

見まわしてみれば、いま子どもや若者たちのまわりには、「対人関係の病」であると同時に「自意識の病」でもあると言っていいようなさまざまな問題がさまざまな形で現れている。たとえば、すでに述べたように、最近若い人たちの間では「自己臭症」とか「醜形恐怖症」といった類の病気が増えつつあると言われているのであるが、そういった類の病気こそまさしく「対人関係の病」そのものであり、かつ「自意識の病」そのものであるということ、説明するまでもないだろう。また、「拒食症」や「過食症」など、一般に「摂食障害」と呼ばれる病気や「ダイエット症候群」とでも呼ぶべき「病気ならぬ病気」が非常に広く広がっているとも言われているのであるが、そういった類の「病気」もまた、基本的には「対人関係の病」そのものであり、かつ「自意識の病」そのものであるということ、あらためて説明するまでもないだろう。そのほか、いま子どもや若者たちのまわりには「対人関係の病」であると同時に「自意識の病」でもあると言っていいようなさまざまな問題がさまざまな形で現れているのであるが、そういった問題はいずれも、貧しかったかつての時代ならば決して見られなかった問題であり、かつ、「いま」という時代が豊かな時代だからこそ生じている問題だという意味で（すでに述べたように）「豊かさの病」と言ってよいだろう。まさしくそういった「豊かさの病」を次から次に生じさせてしまう時代、それが「いま」という時代なのである。

*

とすると、そういった時代を生きる子どもたちにとって、いまいちばん必要なことは何なのだろうか。「そういった時代のなかでなおかつ生きていくために必要な感覚を身につけること」と言ってよいのではないか。

それでは、「そういった時代のなかでなおかつ生きていくために必要な感

覚」とは、具体的にはどのような感覚なのだろうか。「自分は自分であっていいんだ」という感覚、つまり、「自分で自分を肯定できる」という意味での「自己肯定」の感覚、あるいは、「ありのままの自分を自分で受容できる」という意味での「自己受容」の感覚と言ってよいのではないか。それは、言いかえれば、齊藤^{さとる}学が言う意味での「自尊心」でもあり¹²⁾、言葉の本来の意味での「自己愛」でもあると言ってよいだろう。いずれにせよ、そういう感覚こそ、「いま」という時代を生きていこうとする場合、何より必要となってくる感覚だし、何より大事な感覚だと言ってよいのではないか。

なぜか。

その理由は、「仮にそういった感覚をもつことができなかつたとしたらどうなるか？」と考えてみれば、自ずと明らかになってくる。

すでに述べたように、いまの若い人たちは、一般的に言って、対人関係場面で異常なぐらいに気を使ってしまう。そのため、自分がこう言ったら相手はこう思っているやな思いをするのではないか、こう言ったら相手はこう思っているやな思いをするのではないか、こう言ったら相手はこう思っているやな思いをするのではないか、などと考えてしまつて、言いたいことも

12) 「自尊心」について齊藤は次のように言う。すなわち、「私のところに来ている人たちの悩みは何かというと、一言でいえば、『わたしは承認されているか?』です。(中略)とにかく自分というものに自信がない。これを『自己評価が低い』と言っています。自尊心の欠如とも言えます。ここで言う自尊心は、『わたしはこのままで世の中に受け入れられる価値がある』『わたしは人に愛され大切にされるのが当然である』という信念のことです。人はこの信念を備えることによって初めてこの世に生きるための種々の能力を発展させることができるのです。その意味で、これは『生きる力』とも言えます。わたしのところに来ている人たちにはこの『生きる力』が弱いと言えるのです」と。齊藤学『「家族」は怖い——母性化時代の父の役割』日本経済出版社、1997、94頁。ここで齊藤が「人はこの信念を備えることによって初めてこの世に生きるための種々の能力を発展させることができるのです。その意味で、これは『生きる力』とも言えます」と語っている部分は非常に重要である。なぜなら、齊藤によるこの語りは、自己肯定と自己受容の感覚こそ「生きる力」の基盤となるということを説得的に語っているからである。

言わず、相手に合わせるのに汲々としてしまっている。と同時に、いまの若い人たちは、自分が相手からどう思われるかということにも異常なぐらいに気を使ってしまう。そのため、自分がこう言ったら相手からこう思われるのではないか、こう言ったら相手からこう思われるのではないか、こう言ったら相手からこう思われるのではないか、などと考えてしまって、自意識過剰のあまり身動きがつかなくなってしまう。

とすると、そういった状況が一般的にあるなかで、にもかかわらず「自分は自分であっていいんだ」という感覚をもつことができなかつたとしたらどうなるだろうか。対人関係場面でますます気を使い、ますます自意識過剰になって身動きがつかなくなるということになってしまうのではないか。そして、その挙げ句行き着く先が最終的には「対人関係の病」であり、かつ「自意識の病」だと言ってよいのではないか。とすると、そういった時代のなかでなおかつ生きていこうとする場合、「自分は自分であっていいんだ」という感覚をもつことができるということがどれほど重要になってくるか、明らかだと言ってよいのではないか。

それでは、そういった感覚を子どもがもつことができるようになるためには、子どもを取り巻く大人たち（特に親）としては、いったいどうすればよいのだろうか。

その答はもう明らかである。「お前はお前であっていいんだよ」という関係を子どもとの間に作っていくこと、なのである。言い換えれば、固有の意思や欲求をもった一個の「人間」として子どもを受容し肯定する関係を子どもとの間に作っていくこと、なのである。真木悠介の言葉を借りて言えば、「出会い」の関係を子どもとの間に作っていくこと、と言ってもよいだろう¹³⁾。そういった関係をまわりの大人たち（特に親）が子どもとの間に

13) 真木悠介は次のように述べる。「われわれが他者と関係するときに抱く基本の欲求は、二つの異質の相をもっている。一方は支配する欲求であり、他方は他者との出会いへの欲求である。(中略) 支配の欲求にとって他者とは、手段もしくは障害であって、他者が固有の意思をもつ主体として存在することは、状況のやむをえぬ真実として承認されるにすぎない。ところが出会いの欲求にとっては、まさ

作っていったとき、はじめて、子どもは「自分は自分であっていいんだ」という感覚をもつことができるようになっていくはずなのである。

ところが、皮肉なことに、まさしくそういった関係を作ることができなくなってしまいかねないのが「豊かな時代」の親たちなのである。

なぜか。

その理由のすべてを語り尽くそうと思うならば、多くのことを語らなければなるまい。しかしながら、その理由のひとつ——おそらくもっとも大きな理由のひとつ——として、「豊かな時代」とは親が子どもの幸せを願うことが現実的に可能となった時代だということが挙げられよう。

それでは、なぜ子どもの幸せを願うことが現実的に可能となった時代の親たちは子どもを一個の「人間」として受容し肯定する関係を作ることができなくなってしまいかねないのか。

その理由は、以下のように考えてみれば明らかである。

まず、その日その日を生きていくこと自体が大変なくらいに貧しい状況にあったとしよう。仮にそんな状況にあったとすれば、人はその日その日を何とかして生き^し凌いでいくということそれ自体を最優先の課題として追求しなければならなくなってしまいうだろう。当然、「よりよき明日のために」とか「より幸せになるために」と考える余裕などそこにはありえないということになるだろう。もちろん、「子どもの幸せのために」と考える余裕もそこにはありえないということになるだろう。

それに対して、豊かになった時代とは、そういった「切迫した」課題からは人びとが解放されて、「よりよき明日のために」とか「より幸せになるために」と考える余裕をもつことができるようになった時代なのである。当然、「子どもの幸せのために」と考える余裕もそこには生まれてくるということになるだろう。

こうして、豊かな時代とは、その日その日を生き^し凌いでいくことそれ自

↳ しくこのような他者の自由とその主体性こそが欲求される」と。真木悠介『気流の鳴る音——交響するコミュニケーション』筑摩書房、1977、181-182頁。

体が成し遂げるべき課題であった貧しかったかつての時代とは違って、親が子どもの幸せを願うことが現実的に可能となった時代なのである。そういった意味では、豊かな時代とは——仮に子どもの幸せを願う親の気持ちを「親ごころ」と呼ぶとすれば——「親ごころの時代」とも言うべき時代なのである。

そういった時代のなか、ほとんどの親は子どもの将来の幸せを願い、「これこれこのような子どもになってほしい」という願いを子どもに対して抱くだろう。そして、その願い通りに子どもがなれば喜び、満足し、安心し、子どもに「愛」と承認を与えるだろう。逆に、その願い通りになることに子どもが失敗すれば失望し、子どもの将来を心配し、怒りや不満やいらだちを覚え、「愛」と承認を撤回するだろう。そうして、親は、意識的であれ、無意識的であれ、親の願い通りに〈なる〉ことばかりを子どもに要求し、子どもがありのままに〈ある〉ことを受容できなくなってしまうのである。

こうして、子どもの幸せを願うことが現実的に可能となった「豊かな時代」とは、皮肉にも、ほかならぬ子どもの幸せを願う「親ごころ」のゆえに、親が子どもを一個の「人間」として受容し肯定することができなくなってしまうかねない時代なのである。そして、その結果、「いま」という時代を生きる子どもたちにとって何より欠かせない自己肯定と自己受容の感覚を親自身が親自身の手で子どもたちから奪ってしまうことになりかねないという、そのような時代なのである。そのことがどれほど生き難い状況に子どもたちを直面させることになるかについては、すでに述べた通りである。

以下、そうした点について簡潔に語っている齊藤学の文章を引用しておくこととしよう。彼は次のように語る。すなわち、「〔子どもから自尊心を奪う最大の要因の〕ひとつは『条件付きの愛』です。『条件付きの愛』というのは、『おまえが小さい子なら愛してやる』『おまえがかわいくていい子なら愛してやる』『おまえがいい成績なら愛してやる』『おまえがわたしを大事にしてくれるなら愛してやる。そうでないなら親子の縁は切る』といっ

たような愛です。これは現代の少子化の中で、非常に普遍的な『虐待』となっています。(中略) もちろん、親に『条件付きの愛』の自覚はないでしょう。しかし子どものほうは、親はわたしを丸ごと見てくれている、まともに受け入れてくれているのではないかと、ということに疑念をもっています。いい子の部分でしか接してくれていないと思うから、親にはいい子として接しますが、それは非常に息苦しいものです。結局、本当の自分は親に承認されていない、自分そのものは愛されていない、そして愛されないのは自分がダメだからと、自己評価はどんどん低くなります。こういふ、親からの承認を得られなかったと深く傷ついた人は、その後の人生の中でも、出会う人すべてに、自分はどう思われているか、自分は世間から承認されているのか、自分は存在する価値がないのではないかと、そういう思いにとらわれつづけます」と¹⁴⁾。

*

「豊かな時代」とはこのような時代なのである。

それは、まず、「日常的な」欲求を次から次に満足させていくことを通して、成し遂げるべき課題や目的を非常に持ち難くさせ、「課題指向的」な生き方や「目的指向的」な生き方を著しく困難にさせてしまう時代なのである。

それと同時に、豊かな時代とは、そういった状況のなかを生きていくためには絶対に欠かせない自己肯定と自己受容の感覚を子どもたちが育んでいくことを著しく困難にさせてしまいかねない時代でもあるのである。なぜなら、そういった感覚を子どもが育んでいけるようになるためには、子どもが固有の意思や欲求をもった一個の「人間」として受容され肯定される関係に包まれつつ成長していくことが絶対的に欠かせない条件であるにもかかわらず、そういった関係を作れなくなってしまいかねないのが豊か

14) 齊藤, 前掲書, 95-97頁。

な時代の大人たち（特に親）だからである。

こうして、豊かな時代の子どもたちは、一方では自己肯定と自己受容の感覚なしには生き難い状況のなかを生きるべく運命づけられた存在でありながら、ほかならぬ自己肯定と自己受容の感覚そのものを非常に持ち難くさせられてしまった存在でもあるのである。そういった意味では「二重の」生き難さを背負わされてしまうことになりかねない存在、それが豊かな時代を生きる子どもたちだと言ってよいのではないか。そして、まさしくそういった意味での「二重の」生き難さを現実^ニに背負わされてあえぐ子どもや若者たちの姿こそ、「豊かな時代」ゆえに現れてくる「豊かさの病」に苦しむ子どもや若者たちの姿だと言ってよいのではないか。

冒頭でも述べたように、登校拒否が依然として増加し続けている。そのことは、「いま」という時代が子どもたちにとって（実存的な意味では）ますます生き難い時代になりつつあるということを物語っていると同時に、ただでさえ（実存的な意味では）生き難いこの豊かさのなかを生きていかなければならない子どもたちが、まさしくその豊かさのなかを生きていくために必要な自己肯定と自己受容の感覚をますます持ち難くさせられつつあるということをも物語っているのではないか。とすると、いま子どもを取り巻く大人たち（特に親）にいちばん求められていることは何なのだろうか。子どもを一個の「人間」として受容し肯定することの意義と重要性を充分すぎるぐらいに認識すること、そして、そのために必要な「知恵」と「センス」と「テクニック」を磨いていくこと、そう言ってよいのではないだろうか。